

令和二年 一月 二十六日

青鳳会講師 吉野 久

○ 緒 言

花粉症の治療を目的として、鍼灸院を訪れる人は少ないのではないだろうか。よほど重症で、全身の倦怠感や、頭重感を覚えるような患者であれば別だが、概ねは目、鼻、喉などの粘膜症状を抱えているにすぎない。

したがって、腰痛や膝の痛みなどの治療に付随して治療をほどこすことになる。しかし、こうした、目や鼻にたいする標示治療で、花粉症が軽減されれば、患者にとっては大きな助けになる。

また後ほど話をするように、腹部に皮内鍼を固定するという簡便な処置で花粉症を軽減することができることを考えると、患者に鍼灸の効果を知ってもらう上では、大きな意味がある。

それはさておき、今回は花粉症を題材にして、五行の相対関係を応用した全身治療というものを考えてみたい。これは私が臨床をおこなってきた上で、ながく疑問だったことに対する一つの解決策であり、五行の相対関係を考えるうえで、意味のあることだと考える。

ともかくも、こうした話を始めるまえに、西洋医学では花粉症をどのように考えているかを、改めて見てみよう。

1. 花粉症の概要

花粉症はI型アレルギーに分類される疾患のひとつで、文字どおり植物の花粉が、鼻や目などの粘膜に接触することによって引き起こされ、発作性、反復性のくしゃみ、鼻水、鼻詰まり、目のかゆみなどの一連の症状を引き起こす症候群のことである。日本においては北海道の大半と沖縄を除いてスギ花粉が抗原となる場合が多い。

■ 一般的症状(一次症状)

主な症状は、くしゃみ、鼻水、鼻詰まり、目のかゆみとされ、一般に花粉症の4大症状と呼ばれる。

■ 二次症状

後鼻漏

頻度は低いが喘息に似た症状が出ることもある

喘息患者である場合はその発作が起きることもある

目の異物感や流涙、目やに

耳の奥の痒み

頭痛や頭重感、微熱やだるさなどの全身症状

口から入った花粉や花粉を含んだ鼻水を飲み込むことにより、下痢・吐き気・腹痛などの消化器症状が出る場合もある

2. 花粉症の病理機序

花粉症は、患者が空中に飛散している植物の花粉と接触した結果、後天的に免疫を獲得し、その後再び花粉に接触することで過剰な免疫反応、すなわちアレルギー反応を起こすものである。アレルギーの中でも、IgE（免疫グロブリン E）と肥満細胞によるメカニズムが大きく関与する、即時型の I 型アレルギーの代表的なものである。

■ 感作成立

花粉症の患者は、症状が現れる以前にそのアレルギーの元（アレルゲン）になる花粉に接触している。目や鼻などの粘膜に花粉が付着すると、花粉からアレルゲンとなるタンパク質が溶け出し、マクロファージ（貪食細胞）に取り込まれ、非自己（異物）であると認識される。

この情報はリンパ内にある B 細胞に伝えられ、B 細胞はその花粉アレルゲンと反応する IgE 抗体を作り出す。

この時点で、リンパ球 B 細胞が、花粉が異物であると記憶したことになり、その後は花粉が取り込まれるたびに IgE が産生され、血中の肥満細胞に結合することになる。この結合が一定レベルまで達したときが、感作成立の時点であり、発症の準備が整ったことになる。

■ 抗原抗体反応 …アレルギー症状の発症

IgE 抗体と血中の肥満細胞の結合が一定レベル以上になると、肥満細胞は活性化し、ヒスタミンやロイコトリエンといった化学伝達物質を遊離するようになる。ヒスタミンは三叉神経を刺激してかゆみを感じさせたり、くしゃみ反射を起こしたりする。また、ロイコトリエンは血管を広げ、粘膜が腫れ上がり、鼻詰まりを起こす。以上が、花粉アレルギーの発症機序である。

青鳳会 花粉症に対する鍼灸治療

相生・相剋・相乗・相侮関係を考える

令和二年 一月 二十六日

青鳳会講師 吉野 久

西洋医学的な花粉症の理解のなかで、花粉症は粘膜上の刺激が問題になるということが明らかになった。粘膜上の刺激が原因でおきる症状であるから、五行の分類で判断すれば、筋肉の症状、すなわち脾の証であると判断できる。

またこれを、血中の肥満細胞とIgE抗体の問題とすれば、血の症状、すなわち肝の証として治療することもできる。

手始めに、花粉症を脾の証で治療することとして、この脾の証の病を治療するうえで、どのような治療の組み立てができるかを、今回は問題にしたい。

まず脾の証を治療するには、脾に直接アプローチしてもよい。

次に考えられるのは、相生関係を利用して、火を補う方法が考えられる。

次には、相剋関係を利用して、水を補う方法が考えられる。

脾を直接補わずに、火または水を補うというのは、この方が効果が大きいからである。さらに言えば、実際に相生関係よりも相剋関係の方がより効果的だといえる。相生と相剋を歴史的に比較してみた場合、相剋関係の方が早く世に出たという経緯もある。

ともかくも、相剋と相生について、内経医学(素問・靈樞)では、どのように述べられているのか見ることにしたいのだが、これは黄帝内経ではなく、難經に於いて論じられているものを見ることができる。

難經 六十九難 . . . 補寫

虚者補其母、實者瀉其子。

この六十九難の具体的な取穴方は、七十九難に述べられている。

難經 七十九難 . . . 補寫における取穴の実際

迎而奪之者瀉其子也、

隨而濟之者補其母也。

濟…すくり、援助する

假令心病、瀉手心主俞。

俞…俞士穴

補手心主井。

井…井木穴

ここに述べられているのは、補法と瀉法を利用した治療法である。

相生と相剋でいうなら、ここには相生関係については述べられているが、相剋関係については述べられていない。ならば、相剋についてはどこに書かれているのだろうか。また、「子を瀉す」とは、どういう名の関係なのだろうか。

この疑問に対しての答は、素問・陰陽別論7に述べられている。

素問 陰陽別論第七

死陰之屬、不過三日而死、

屬…たぐい、同類のもの

生陽之屬、不過四日而※死。 ※全元起本は已、新校正に云う別本では生

所謂生陽死陰者肝之心、謂之生陽、 ……木生火、相生

心之肺、謂之死陰、 ……火剋金、相剋

※肺之腎、謂之重陰、

※「肺者當肝字訛也。素問、太素、皆不正。肝之腎者子乘母、即相生之變」

…… 木 ↓ 水 相乘(相生の逆)

腎之脾、謂之辟陰、死不治。

…… 水 ↓ 土 相侮(相剋の逆)

以上が相生・相剋・相乗・相侮関係である。

まず相剋という関係が存在するなら、他の関係もあつて然るべきだろうという推論によつて、他の三者が導かれることになる。このように演繹的に物事を展開してゆく思考は、古經の特徴であり、古代中国人の思考上の嗜癖である。

こうした思考展開の一例として、次に難經に述べられている次傳間藏の関係について見てみたい。

難經 五十三難

五十三難曰、經言七傳者死、間藏者生何謂也。

然七傳者傳其所勝也、間藏者傳其子也。

何以言之、假令心病傳肺、肺傳肝、肝傳脾、脾傳腎、腎傳心、一藏

不再、傷(はじめ)の藏、再せずして傷る。故言七傳者死也、

間藏者傳其所生也。

呂曰七當爲次字之誤也。此下有間字(次間傳↓相剋)、即知上當爲次又

有五藏(次間傳五藏者死)、心獨再傷、爲有六傳耳。此蓋次傳其所勝藏。

故其病死也。

五十三難曰、經言次間傳五藏者死。…相剋関係で次に伝えてゆくものは死す。

呂曰く、七は當に次字の誤りと爲すべし。此の下に間字あれば、即ち上は當に次にはまた「五藏」あるべし。心ひとり再び傷れば、六傳あると爲るのみ。此れ蓋し、その勝つ所に次傳す。故にそれ病んで死するなり。

※清段玉裁…七、次、黍は假借して通用す。

※呂氏…呂廣、三国時代の呉の太医令。「難經詳解」を書いた。

假令心病傳脾、脾傳肺、肺傳腎、腎傳肝、肝傳心、是母子相傳、竟而復始、如環之無端、故言生也。

呂曰間藏者、間其所勝之藏而相傳也。

呂曰く、間藏とは、その勝つ所に間するの藏にして相傳するなり。

間藏とは、その勝つ所の間にある藏を相い傳つてゆくことで、これは相生関係になるので生きる。

心勝肺、脾間之、 2

肝勝脾、心間之、 1

脾勝腎、肺間之、 3

肺勝肝、腎間之、 4

腎勝心、肝間之、 5

此謂傳其所生也。

(心を先頭にしてあるため、順不同になっている)

小曾戸洋先生は、難経が「簡潔で」あり「強い個性が感じられる」と述べているが(「鍼灸の歴史」大修館)、この五十三難の論をみるとそれがよく分る。またこうした難経を、黄帝内経以上に、平安・鎌倉時代から江戸時代を経て現代まで長く日本人が好んだ(「漢方の歴史」大修館)、というのも興味ぶかい。

また、この難経贗真にたいする反省が、矢数有道先生の提唱した内経へ還る道となつて行つた。

以上は難経に述べられていることだが、黄帝内経、難経を離れば、所変つて品も変わるということになり、神農本草経には、君・臣・佐使、七情という関係も想定されている。

君・臣・佐使 …… 処方中の薬物配合率が、一・二・五か、一・三・

九であるのが良いという説。

七情 ……二味の薬物を組み合わせると、どのような複合作用が発

言するかを分類した配合原則。

情＝対象に注ぐ気持ち、影響、関係。通情(情を通ずる＝肉体関係を結ぶ)、定情(情を定む＝結婚する)

単行

ちうじゆ
相須 ……互いに協力

相使 ……一方的に協力

ちうさつ
相殺 ……互いに毒性を消す

ちうい
相畏 ……一方的に毒性を消す

相反 ……互いに有効性を消す

ちうお
相惡 ……一方的に有効性を消す

※相反、相惡は禁忌

Ⅲ 治 療

A 全身の治療

脾の証として、あるいは肝の証として治療を行なう

東洋医学的な見方の話のはじめに、花粉症が脾の証であると仮定し、三通りのアプローチの方法があると説明した。

①脾に直接アプローチする

②火を補う ……火 ↓ 土 相生

③水を補う ……水 ↓ 土 相侮

③について、水から土に働きかける方法について、相剋関係を使うと話したが、正確には相侮関係を用いるのである。

しかし、これは陰陽別論によれば「死陰」であつて、土を生かす方法ではない。ならば何故この方法で、土を生かすことができるのかと言へば、水を補うことによつて、土剋水の関係を強化するのである。

相剋関係とは、一方的に土が水を殺してしまふ関係ではなく、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木、木剋土、と循環してゆく関係であり、相生と同様に自然界においては、あるべき関係だと考えなければならない。(先の五十三難で、病が相剋関係で五臓を相い伝わつて行けば死に至る、という論があつたが、これは死に至らしめるような重病と考えなければならない)

他の例でいえば、脈診において、脾と肝が同時に虚していることがある。消化器に障害がある場合には、比較的よく見られる脈状である。この場合、剋される脾を補うことによつて、肝脈も力を得ることがある。これは相剋関係を応用した、脾と肝の同時治療となるのであり、相手を殺すこととは無関係な治療である。

B 部分的な治療の取穴

○ 鼻の治療

挟鼻、迎香、印堂、四白、顴会、素膠など

○ 目の治療

攢竹、魚尾、太陽、睛明、玉枕、後谿、帶脈など

○また、治療のおわりに、膻の周囲＝脾の領域に皮内鍼を留めておくことも、有効である。